



核と放射能を、半年かけて 学ぶドイツの高校生と 福島の高校生の合同授業



物理の教科書の
「放射能と核エネルギー」のページ

先日、NPOアースウォーカーズ主催で福島の高校生8人がドイツを訪れ、私もボランティアで4日間ハノーファーで受け入れをした。

一緒に3日間、地元の学校で授業を受けたのだが、ドイツの高校1年生は半年かけて放射能について学んでいることを初めて知って驚いた。

福島の高校生との合同授業が始まり、初回の物理の授業で先生が「放射能と聞いて何を思い浮かべるか」と尋ねると、生徒から「危険」「死」という言葉が真っ先に飛び出した。グループで討論した後、「核分裂」「エネルギー利用」「原発」「核廃棄物」「福島」「 α 、 γ 、 β 波」「レントゲン」「不毛の地」「原爆」「広島・長崎」「再生可能エネルギー」と続いた。

一段落して先生が「放射能はポジティブなものかネガティブなものか」と問うと、日独の生徒たちからネガティブだという意見が相次いだ。「放射線療法など医療に使えるのはいいけど、それ以外はよくない」「事

故が起こったら大変」「発電には再生可能エネルギーを使えばいい」といった議論となり、盛り上がった。その後教科書を開き、核融合や核廃棄物の写真を見ながら「これは何をあらわしているのか」とまた討論。90分の授業はあっという間に過ぎた。

授業終了後、先生に聞いたところ「教師は自分の意見は言うてはならず、生徒たちが自分で考えるよう導くのが仕事。放射能についてじっくり学ぶのは、国がそう望んでいるから。学校で正しい知識を得ることでネガティブな面を理解し、それが脱原発政策の土台となる」という。

ドイツは2022年の脱原発を決めており、国民の総意を得ているといわれる。ドイツの学校はほとんどが公立であり、福島原発事故が起こる前から時間をかけて放射能を授業で学んできたことも無関係ではないだろう。

一方、原発は必要かという話を福島の高校生4人とした時、4人とも

是非をはっきりいわず「原発がないと燃料を輸入することになるから、経済によくない」「反対派の意見ばかり聞くので、賛成派の意見も聞いてから決めたい」というのでびっくりした。

自宅が福島第一原発から何キロ離れているかは知らない。「原発は安全、経済が第一」という刷り込みがいかにか強いかわを垣間見た思いだった。「福島は安全」とアピールする子もいて、ドイツの生徒たちは驚きを隠せないようだった。

しかし中にはドイツ滞在を通して、福島や日本の状況について批判的な目を持つようになった子もいるらしい。10年後、20年後、みな元気にやっているのだろうか。それだけが心配である。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

AKIRA の 成長記録



8月から5年生になりギムナジウムに入った明は、毎日るるんです。

片道2キロ以上だと公共交通の定期券が無償支給されるため、2.5km離れている明も定期券をもらいました。自転車の方が早いのに、大人の気分になれるのかバス1駅、路面電車3駅と乗り継いで学校に通っています。

1学年5クラスあり、1クラスは30人で担任の先生は2人

います。90分1コマで毎日3コマ。8時に始まって13時20分に終わります。つまり6時間目までを午前中にやってしまうのと同じですね。持参したパンや果物などを休み時間に食べ、昼食は自宅で食べるのが一般的です。

明は火曜日から木曜日まで学童保育なので学校が契約している業者に給食を頼み、15時半まで学校で宿題やサークル活動をします。サークルのひとつは「スマートフォンの使い方」。明はスマートフォンを持ってないのに参加していて、みなで校舎の高さやボールの速さを測ったりして楽しいようです。

紆余曲折の未決まった学校だからどうなるかと思ったけれど、明は「世界一の学校、先生も子どもも最高！」と大絶賛。よかったなーと胸をなでおろしています。